

原城跡のユネスコ世界文化遺産について

全 般

平成 30 年(2018 年)、22 件目の日本の世界文化遺産としてユネスコより認定を受けました。
長崎県と熊本県に分散する 12 件の史跡・施設及び集落等の集合体としての世界文化遺産です。
原城史跡は、最も象徴的で中核をなすものです。

原城史跡の場所



原城史跡全景(ユネスコ世界文化遺産)



島原の乱の概略

①口之津の事件(島原の乱発火戦闘) 1637 年 10 月

3 年連続の飢饉で多くの餓死者が出ていたにも拘らず、年貢取り立てが厳しく、庄屋の息子嫁(臨月期)に登丸籠(トマルカゴ)に押し込め、川に浸ける水攻め拷問し、母子ともども殺してしまいました。絶望した近隣百姓約 800 人が駐留していた島原藩責任者の家老を襲撃して、瞬く間に島原の乱へと拡大しました。

②島原城下の襲撃 1637 年 10 月

上記逃亡した島原藩責任者の家老を追撃し、島原城城下を 5~6 千の一機勢力が襲撃し、実質石高 4.2 万石に比し、10 万石規模の備蓄をしていた鉄砲等の武器や兵糧米の多くを確保し、島原の乱終焉の地、原城籠城での合戦で用いられました。

③原城籠城決戦(島原の乱) 1637 年 11 月~1638 年 2 月 28 日

一機軍約 3.7 万(半数以上は婦女子と老人)

幕府軍当初数万 → #3 総攻撃時約 12 万

参考動画 URL: <https://kirishitan.jp/components/com001>

・ 12 月 20 日幕府軍 #1 総攻撃

総大将として任命された板倉重昌(イタクサイゲマサ)は三河の小大名であった為、九州の大名軍勢を主力とする幕府軍は各正面で勝手に戦況を評価・判断して戦闘を行い、総攻撃は全面失敗となりました。

・ 1 月 1 日幕府軍 #2 総攻撃

総大将重昌は、状況全般を評価して持久戦を決断しましたが、幕府軍側の事情により、再びの総攻撃の方針となりました。幕府軍側の統制の欠如状況に変わりはない、重昌以下の軍勢約 300 名は孤軍突進して、全滅してしまっった。

・ 2 月 27 日幕府軍 #3 総攻撃

幕府は総大将に筆頭老中の松平信綱を任命し、幕府軍側の統制力を抜本的に強化し、総勢 12 万の兵力をもって、多正面からの波状攻撃により原城攻略を実施しました。

原城籠城一機側は全員がなで斬り殺害され、遺体は見せしめのために 130 年に亘って放置され、腐乱し、白骨化して、風化する状況を強いられました。

原城史跡発掘調査の一場面(約 350 年間放置された人骨)



城郭から海洋遠方に願いを捧げるキリスト教徒石像



何故、島原の乱後もキリスト教信仰は継続したのか？？（司馬遼太郎氏からの影響妄想か！？）

< 史 実 >

- 豊臣秀吉による禁教令は既に 1587 年に出されており、1596 年には宣教師及び信者 26 名を禁教令徹底のために、見せしめとして火炙りで処刑した。
- 1623 年からの徳川家光の治世以降、キリスト教に対する迫害は苛烈を極め、ローマ教皇側の古文書によれば、島原の乱の 4 年前 1633 年以降は司教、司祭及び助祭の誰一人も存在していない。→ 司教等がいなければ洗礼を実施できず、新たな信者は発生しない。
- 1625 年、家光からキリスト教禁教令の徹底を詰問された島原藩主・松倉重政のキリスト教迫害は桁外れに残酷さを増し「雲仙地獄攻め」や「蓑踊り」に代表されるなぶり殺し拷問を多用し、禁教令と年貢取り立ての徹底を図った。→ 領民の殆どはキリスト教を棄教した。
- 1549 年フランシスコ・ザビエルによるキリスト教布教活動以来、約 100 年間、地方領主によるキリスト教布教・キリスト教徒に対する弾圧は幾多もあったが、キリスト教徒による反乱・一揆はただの一度も発生していない。
- 島原の乱の首謀者は島原藩主・有馬氏や肥後南部藩主・小西行長の元家臣(地侍)達で、一揆軍の団結・一体化の為にカリスマの存在が必要であり、神父としての「天草四郎」であった。
- 徳川幕府は、禁教令の徹底と鎖国体制の更なる堅牢化を達せすべく、「島原の乱はキリシタン一揆である」と天下に示すことが必要であった。
- 乱参加で原城籠城の全員がなで斬り殺害(半数以上が婦女子及び老人)され、遺体は見せしめのために吊うことを禁じられ、約 130 年間放置された。
- 島原半島の島原城下町以南の地域領民は殆どが死に絶え、又、生き残った島原市以北の領民は、キリスト教は恐ろしいもの、との幕府刷り込み認識が強烈であったため、潜伏キリシタンは存在していない。

< 妄 想 >

- 天草諸島領民で乱に参加しなかった領民で棄教した者でも、乱に参加した親族が無残に殺され、吊うことも許されぬ状況下、何とか関係者を吊いたいとの思いから潜伏信仰に至る者が多く発生したのでは、と考えられる。
- 島原の乱での犠牲者が親族でなくとも、過去に同一のキリスト教であった者、キリスト教徒ではなくとも犠牲となったキリスト教徒に憐れみを思う者が、キリスト教に殉じた者たちを吊うために潜伏信仰を継続させた、と思いたい。
- 原城史跡の沖合 300m に彼岸時期の最大干潮時に、白い洲が出現します。

白い洲は「リササムニューム」と言う、生きていたときは赤い海草ですが、死ぬと純白な石灰質の様な固形物になります。

まるで、赤い血を流して死に絶えた原城籠城者が、やがて白骨化していく変化を暗示している様で、死者が自らを吊っているのかと思ってしまう。時期が彼岸の時期、墓参りの時期と言うのも気になることです。



原城史跡沖のリササムニュームの白洲



リササムニュームの植物生存と死後の石灰化